



TITLE:

<學界動向> 中國古代史研究の近況 二. 戦後中國に於ける甲骨學

AUTHOR(S):

伊藤, 道治

CITATION:

伊藤, 道治. <學界動向> 中國古代史研究の近況 二. 戦後中國に於ける甲骨學. 東洋史研究 1952, 11(5-6): 481-483

ISSUE DATE:

1952-07-25

URL:

<https://doi.org/10.14989/138943>

RIGHT:

二 戰後中國に於ける甲骨學

伊 藤 道 治

殷墟出土の甲骨文が始めて世に現れた一八九九年（清光緒二十五年）より今日まで凡そ半世紀を経過した。その間、劉鹗、羅振玉氏の著録、王國維、葉玉森氏らによる解讀をはじめ多數の先人の研究の結果、甲骨文の古代史に對する重要性が認識されるようになったが、一九二八年（民國十七年）より中央研究院歷史語言研究所によつて行われた殷墟の科學的發掘は、考古學上の成果と共に甲骨文の研究を飛躍的に發展せしめることゝなつた。即ち董作賓氏による「甲骨文斷代研究例」の發表は甲骨文字そのものゝ年代學的な組織研究を可能とし、その史料價値を確立して甲骨文による殷代研究に重要な基礎を與えることになつた。一方郭沫若氏の「中國古代社會研究」をはじめ多數の人により甲骨文を利用して古代史の研究が開始されたのであるが、今次の戰爭は中國に於ける甲骨學その後の發展を知ることが不可能ならしめた。中央研究院による殷墟發掘は多數の重要甲骨資料を獲得、新しい研究の發展を豫想せしめていたのであるが、戰後中國との交流が再開され、「小屯」を始めとする諸研究、著録が將來されるや、長期にわたる研究のギャップを痛感せしめられることになつた。以下京都大學人文科學研究所にて最近入手した中國の研究を中心として甲骨學の動向を眺めて見たい。

先づ第一に擧げなければならないのは、安陽發掘報告集の一つとして刊行された董作賓氏編著の「小屯」第二本としての「殷墟文字」の甲編（民國三十七年）と乙編上中（民國三十八年）との三冊である。甲編には第一次より第九次までに發掘された龜甲二四六七片、牛骨一三九九片が收められ、乙編上中には第十三次より第十五次までの龜甲一三三四九片が收められている。乙編の董氏の序文によれば、同編下には甲骨合計五千片程のものが、更に十五次にわたる發掘中得られた陶器、骨器、石器、銅器上の文字は丙編にまとめられる計畫であることが知られる。この「殷墟文字」は既刊の著録中最大の量を含むものであり、且つ從來の著録と異なり、科學的な發掘によるものであり、その出土層位と甲骨文との關係が確實なものであつて、斷代研究をはじめ甲骨文研究に最大の價値をもつものである。その他金祖同氏編「龜卜百二十五片」（民國三十七年）李亞農氏撰「殷契摭佚續編」（三四三片、一九五〇年）胡厚宣氏編「戰後寧滬新獲甲骨集」（一一四三片、一九五一年）の新著録を入手した。これとは別に著書録に散在する甲骨の復元に努めた曾毅公氏は約四百片の接合に成功、「甲骨綴合編」二冊として一九五〇年に刊行した。その他胡厚宣氏に「戰後平津新獲甲骨集」（一九四六年刊）、「戰後京津新獲甲骨集」、「戰後南北

所見甲骨錄」(何れも未刊)があることが知られている。

次に挙げなければならないのは、斷代研究を提唱した董作賓氏その後の研究である。同氏の現在までに於ける甲骨學研究の綜合と考えられる。「殷曆譜」(民國三十四年四月刊)が入手出来ないのは非常に残念であるが、「研究殷代年曆的基本問題」(北京大學四十週年紀念論文集乙)、「殷曆譜後記」(歷史語言研究所集刊第十三本)、「殷代月食考」(同第二十二本)大陸雜誌に載せられた「中國古曆與世界古曆」(二卷十期)、「中國古代文化的認識」(三卷十二期)などから考えて、甲骨文にあらわれる月食の記事を基礎として、營業の曆法制度のみでなく、殷周兩朝の存立年代を決定、更に夏王朝の年代をも西紀前二一八三年より同一七五〇年と推定しているほか祭祀制度、殷代各王の配列、或は帝辛の東方征伐などにわたつて可成り詳細に考證しているのではないかと思われる。これと共に挙げなければならぬのは、「殷墟文字」乙編の序文に提出された文武丁時代の貞人十七人にかゝる一郡の甲骨の問題である。こゝにあげられた貞人名をもつ卜辭は、從來何期に屬するか疑問とせられていたものであるが、十三次發掘において同一坑より多量の同群卜辭が出土、その研究の結果第四期文武丁時代に屬することを決定した。更に同じく第四期に屬する王武乙と文武丁との間の差異から出發して、殷墟時代の殷王朝に、屢々種々の改革運動が行われたと説いている。即ち紀日月法、置閏法、祭祀字體などの點で、第二期祖甲によつて一度改革が行われ、第四期文武丁に至つて第一期への復古運動、更に第五朝帝乙帝辛によつて祖甲への復歸が行われたとするのである。祭政一致の當時においてこの様なことが實行されていたとするならば、當然他の面でも種々改革が行われたと想像され、歴史上の重要問題である。然しながらこれについて

は、文武丁時代の卜辭とする根據に批判の余地があり、今後の研究を俟たねばならない。

現在上海にあつて活躍する胡厚宣氏は、先にあげた如く多くの新資料の採集に努力すると共に幾多の研究が發表されているやうである。氏は董氏と共に中央研究院の殷墟發掘に従事、「殷墟文字」甲編の釋文作製に當つた人であり、民國三十三年に「甲骨學商史論叢初集」四冊、翌年その第二集二冊を發表したが、何れも未だ將來されていない。これらのうちには「殷代封建制度考」、「殷非奴隸社會考」、「殷代婚姻家族宗法生育制度」など殷代史研究に重要なものがあることが知られる。胡氏は甲骨學の専門家であると共に、歴史學に對する理解もよく、その成果は董作賓氏からも高く評價されている。その一つについては知ることが出来ないが、恐らくこれら胡氏の研究をも參酌したと思われる董氏の「中國古代文化的認識」によれば、殷代の社會は、

一、殷王朝の權力は強力なものであり、封建制度が實行されて、諸侯は王室に對して從軍貢納などの義務があつた。

一、父系制にして、大宗小宗の宗法制度が確立し、嫡后の制も實行されていた。

一、官制に於いては、古典周代金文に見られるものとは同一の組織があつたと考えられる。

一、軍隊組織には、左右中三軍制があり、兵力も數千から三万人に及ぶものが徴收された。更に歩兵、騎兵のほか戰車も存在していた事實が考古學的に實證されている。

一、奴隸は少數の罪人と俘虜とに限られていた。

一、殷王朝の版圖は中原を中心として陝西河北山西一帶、南は揚子

江まで達し、交通地域は現中國全域に通じていた

ということが知られるが、これらの研究の結果、かつて「中國古代社會研究」において古代奴隸制を説いた郭沫若氏も民國三十五年の「十批書」（未入手）中の「古代研究的自我批判」において、殷代に關する限りその説を撤回せざるを得なかつたことが傳えられている。

これは甲骨文字の解讀が進歩したことにもよるが、董氏が力説する如く、甲骨文字は原始的な象形文字から既に可成り進歩した文字であり、例えその中に古い象形文字の形態を残すものがあつたとしても、それのみによつて直ちにその時代の社會の反影であるとなし得ないことが充分認識されていなかつたことにもよる。この事實を裏付けるために行われたと思われる同氏の「從歷些文看甲骨文」（大陸雜誌三卷一・二・二期）は、雪南地方に行われる象形文字歷些文との比較研究であり、氏は更に古代エジプト文字との比較も行われているやうである。これは甲骨文字の研究に新しい方法を導入したものと言ひ得るであらう。

胡厚宣氏は「古代研究的史料問題」（一九五〇年刊）に於いて、「中國歷史大系古代史」や呂振羽氏の「中國社會史綱」などにおける甲骨文の誤用を痛烈に指摘し、現在甲骨學は日々進歩していることに對して歴史家の反省を求めている。董作賓氏も「殷墟文字」甲編の序において、甲骨文研究は未だ初步の段階にあり、甲骨資料の蒐集、復原分類及び辭書の作製が現在第一の任務であり、然るのち周到な注意をもつて甲骨文の利用をなす可きを説いている。

この様に現在なほ初步の段階にあり日々に進歩する甲骨文字の基礎研究は、従來行われて來た文字の構造を中心とした解讀研究と異なり多くの文例を比較することによつてその解讀を行わんとしている。歴

史語言研究所集刊第十三本に收められた屈萬里氏の「甲骨文从比二字辨」は甲骨文編に同一文字として从字（統率の意）に收められた𠂔と𠂔とを、構造と共に文例を比較することによつて从と比とに區別し、更に从字を祈願に對する神の應答を示す語辭と英語の前置詞 from 或は is を意味する語、及び聽從するの意の語に分け、比の意義を親近する意味の文字と規定している。

この傾向は同號集刊に收められた張政烺氏の「𠂔字說」或は著錄「殷契撫佚續編」の考釋にも見られる。これらの中最も重要なものは、張秉權氏の「甲骨文類比研究例」（歷史語言研究所集刊第二十本下）であらう。張氏はその副題を「𠂔字學的整理」としている如く、固有名詞𠂔字に對する在來の史官說、先公說、地名說を批判しながらその分類研究の節において、この字と共に使用される文字を十八項目に分類し、二百に及ぶ文例から𠂔字が何を示すのかを歸納しようとしたものである。

この傾向と共に、先に挙げた如く新しい資料の獲得も盛に行われ、それによる新しい發展も見蘊し得ない。一例を挙げれば先に挙げた、「戰後寧滬新獲甲骨集」に含まれる一片に高祖河に歳の豊年を希ふ骨文があり、河が殷の祖先の名であることが判明した。

以上述べて來た所からも明らかな如く、現在中國に於ける甲骨學の研究は、尙ほ初步の段階にあるとは言われるが、以前の基礎研究となり、資料の増加と整理により新しい段階に到達したことを示して居り、今後の研究は更に大規模で組織的な研究に向いつゝあることを物語つてゐる。

（二十七年二月十六日記）

尙お、その後、胡厚宣氏「戰後南北所見甲骨錄」を、東京大學東洋文化研究所に於いて閲讀し得たことと附記す。